

無着造 解深密經疏 (二)

西尾 京雄 譯註

一、緒 言

此譯註に於て(一)とするは、本誌に於てこの題名の下に(一)を發表したことはないが、既に拙著、佛地經論之研究の中に「無着造、解深密經疏に就て」と題して、本疏の第一品を和譯して紹介したからして、其を繼承して(二)と記したのである。こゝでは、第二超過尋思品以下第七諸法無自相品に至る六品を和譯し註解した。

①本疏は解深密經の教義を理解するについては最も基本となる資料であると考へられ、重要な價值あるものであるから、先づ以て、本疏の諸本校訂が爲され提示せらるべきである。

ラモート(Etienne Lamotte)は *Saundhirmocana-sūtra* の五三頁より五四頁に本疏の第一品より第四品を、五八頁より五九頁に第五品を、六五頁に第六品を擧げ、その佛譯は一八二頁より一八三頁に第一品より第四品を、一八七頁に第五品を、一九一頁に第六品を掲げてゐるが、本文の抄出であり抄譯である。而して、此本文は餘本を以て校訂せられず、又、この疏を基本として解釋せられてゐる「解深密經解說」^②をも参照せられてゐないが爲にこの疏に關する限り完璧のものといふことは出來ない。本譯註に於ても亦、未だデリゲ版校訂の機會に恵まれないのであるが、「解說」

を相應せしめることによつて、その和譯について稍々正鵠を失はざることを得たであらうか。

因に註の條下に、「解説」によつて、各品の科を擧げた。科としては、それぞれの下に本文を指示しなくして意味が無いのであるが、未だ、西藏傳の解深密經を和譯する域に至つてゐないが爲に略した。漢譯玄奘譯と藏譯の其とは原本を異にしてゐるのであるから、藏傳にありては、この無着の本疏並に「解説」の科に順據して和譯せられねばならない。かくして、藏傳解深密經は藏傳解深密經としての經格を漢譯諸經の經格と相對的に差別して見られ、以て其等が特殊的思想的域面を持しつゝ瑜伽唯識學圈に於て、統一統攝せられるべきであると考へる。今は其等を他日果すべき意圖の下に、一應、その用意のために掲げて置いたものに過ぎない。

註① *Samdhirmocana-bhāṣya*. P. Tg. Mdo-ḥgrel, XXXIV. 1-14a

② *Samdhirmocana-sūtrasya vyākhyāna*. P. Tg. Mdo-ḥgrel. CXXV, CXXVI 1-27a. cf. Cordier III. p. 491.

二、第二〔超過尋思〕品

第二〔品〕に於ては、一、(一)尋思^①(rtog-ge, tarka)に依據して勝義を思惟するなり。諸餘の外道の勝義を悟入せざる五過失 (*ñes-pa, do'a*) あり。遍求 (*tun-tu tshol-ba, paryeṣaṇa*) の過失と増上慢の過失と執着 (*miñon-par-shen-pa, abhiniveśa*) の過失と施設^②(*ḥdog-s-pa, prajñapti*) の過失と評論(*rtsod-pa, vivāda*) の過失となり。

〔其等は又〕一、唯、餘の人の教^③(*bstan-pa*) のみによつて勝義に悟入することを樂ふこと。二、止(*śamatha*)〔のみ〕を得たる時、唯相を執るのみ(*nimittagrāhamātra*) によつて勝義を證れりとの増上慢。三、安立するに基きて^⑤(*vyava*

sthāpanavāsaṇa) 言説の如く執着すること。四、見等の表示に依つて (upasthāpavyavahāram, niṣṭhitya) 命 (jīva) 等有りと安立し施設すること。五、互に異品に於て施設し、自他の立場に隨着し、憤怒する時⁽⁴⁾ 諍論することにして、次第の如く相應するなり。

此の「尋思の境相を超過する道理ある」五相は勝義を後々に引發する方法にして、次第の如く覺知すべきなり。

(二) 五⁽⁹⁾ 喩は勝義の五相と次第の如く相應すと知るべきなり。かくの如く五種の信解に關して、有性 (yod-pa, saṃta) を打破する信解と欲 (kāma) 信解と分別 (vikalpa) 信解と表示 (vyavahāra) 信解と我所執 (ānuyāgata) 信解となり。

二(一) 諸の過去世⁽¹⁰⁾ とは、世尊があらゆる所にて現等覺せる「世等」なり。究竟せる前世に於てとは、餘の佛等があらゆる所に現等覺せる「世」に於てなり。「俱に」來りつゝとは、あらゆる事象を如實に論議せんが爲に、前に立つことなり。

集「會」してとは、誰でも其等を觀て、近づくことなり。思議しとは、標なり。其は又、自「宗」の本文 (gshun-jugs, samaya) によつて増益と損減とより離れて思議す。それ故に、稱量すと説くなり。觀察すとは、正理 (rtsa-pa) に依つてなり。この「稱量と觀察との」二によつて、如何に思議し、何によつて思議するかを説明するものなり。かくの如く徧尋求する時、證らずして種々意解 (blo-gros thad-dad-pa, bhinnamati) ありとは、各別の意解と成ることなり。別異意解 (yid gñis-can, vimati) ありとは、深き疑なり。變異意解 (blo-gros han-pa, durmati) ありとは、あらゆるものが邪に決定することなり。違背し (rsod-pa) とは、心によつてなり。諍論し (bgyed-par-gyu-pa) とは、語によつてなり。互に「口力によつて」違害す (gnod-pa bgyis) とは、標なり。不如理を語りたる時、⁽¹¹⁾ 羸獢の言を發して「違害する」は罵詈する (sher-bdebs-pa byas-so) なり。如理を語りたる時、默殺すること等によつて、「違害する」は續刺し (gab-gab bgyis) 惱

す(mnan-pa bgyis)なり。壞す(ishor-bcad-pa bgyis)とはこの「一の時に」二によつて「違害する」ことなり。

通達し(rtog-pa)とは、見道によつてなり。作證し(mbon-sum-du bgyis)とは、修道によつてなり。

(二)宣説すとは、標なり。其は顯現し、開解することにして、その中、顯現すとは、法を施設し、安立することによつて善く顯現するが故なり。開解すとは、「其等の法の」義を照了するが故なり。若しは尋思し(brtag-pa, parits)若しは比度し(rjes-su-dpag-pa, anumā)若しは信解す(r mos-pa, adhimuc)能はざるなりとは、尋思(rtog-ge, tarka)と比度の力と信解の力とによつてなり。

註① 解深密經の第二品は解深密經解説(Saṃdhiṃmōcana-sūtrasya vyākhyāna p. Tg. Mdo-igrel CXNV)に於ては srtb より解説せられ、その第二品の總義は左の如くである。



今、本疏は先づこの總義の中、第二勝義相と第三譬喩相とを義釋するものである。而して、本疏の勝義相の義釋は「解説」Sā-bに譬喩相の其は「解説」Sā-bに踏襲・引用せられて居る。

② 施設(bdags-pa)の過失は、本文には貪著(bdod-pa, asakti)の過失となつて居り、Lamotte は l'attachement à leurs idées (asakti) と譯してゐるが、「解説」によりて bdod-pa は bdags-pa の寫誤と見るべきである。

③ 唯、餘の人の教のみとは、尋思に基ける義は互に展轉して教示する。それで勝義を證ることが出来ないから、徧求の過失と

いふのである〔解説〕54b)。

- ④ 止のみを得たる時唯相を執るのみによつてとは、世間道によつて心一境(sams rtsé gcig-tu gyur-pa, cittakagata)のみを得たる時、實に其を勝義であると相を執り、それによつて、又、勝義を證ることが出来ないから増上慢の過失といふのである。
〔解説〕55a)

- ⑤ 安立するに基きてとは、名・句・文の聚の門より言説を安立し、その言説に執着するが故に勝義に悟入しない。實に其が執着の過失である〔解説〕55b)。

- ⑥ 見等の表示によつてとは、見・聞・覺・知の表示に依つて、食者(Za-ba-po)、作者(byed-pa-po)を執する門より、我・衆生・命者・補特伽羅等有りと施設する。かく我を施設することによつて勝義を證らないから、其は施設の過失である〔解説〕55b)。

- ⑦ 互に異品に於て施設しとは、事(dhos-po)に執着することに依つて、論結(sgrub-pa'ni mthah, siddhānta)と本文(sshun-lugs, samaya)との異品を施設し、其に基くことよつて、自己の立場に隨着し、他の立場に憤怒するよりして諍論する。其によつて勝義に悟入することが出来ないから、實に、其が諍論の過失である〔解説〕55b-55a)。

- ⑧ 「互に異品に於て施設し、自他の立場に隨着し」を Lamotte は第四の過失の句として譯出してゐるのは誤りである。

- ⑨ (一)の五喩の義釋は 56a-56b に踏襲されてゐる。

- ⑩ 有性を打破する信解 (yod-pa sel-bar mos-pa) とは、大威力によつて小威力を有るが如く鎮伏する信解 (mthu chen-pos mthu chun-du yod bshin-du Zil-gyis-mnan-par mos-pa)〔解説〕56b,)

- ⑪ 以下は尋思相引發の道理安立と科する經句の逐字釋であるが、その經文の全體ではなく一部である。以下の諸經句釋は「解説」52b) 以下に踏襲してゐる。Lamotte は佛譯してゐなく。

- ⑫ 諸の過去世、この經句は玄奘譯、解深密經、眞諦譯、解節經に共に存しないが、菩提流支譯、深密解脫經に存する。〔我憶〕

「過去世」(大正一六・六六六下)に相當する。

⑬ 究竟せる過去世、玄奘譯、眞諦譯共に無きこと前述と同じ。流支譯の「復過_ニ彼過去世」といふに相應する。

⑭ 刺し、惱ますなり。本疏は *gab-gab kyis mnan-pa byas-so* (7a) とあり、「解説」_ヲ亦 *gab-gab kyis mnan-pa byis* (53a) とあり、兩典同一であつて、其等の基づく經典の經句は又同一の如くであるが、現存の藏傳經文に於ては、*gab-gab byis mnan-pa byis* としてゐる。前句の意味について、Lanotte は *sinulent* と佛譯する。今はしばらく、玄奘譯の「更相續刺惱懷既已」の續刺と相應するが如くであるから、其の譯語に據り、藏傳の經句に順じた。

⑮ (二)の經句釋は、勝義相引發の道理安立と科する下の句釋であつて、「解説」_ニに踏襲してゐる。

三、第三〔過一異〕品^①

第三〔品〕に於ては、一、(一)勝解行地(*adhimuktikarabhūmi*)に住する菩薩は二種の癡妄(*cin-tu-moḥs-pa, pramoha*)によつて過ちて勝義を如理に思惟せざるなり。〔即ち〕假設(*btags-pa, upacāra*)に就ての癡妄と正理(*rigs-pa, nyaya*)に就ての癡妄とによつてなり。假設癡妄とは了義經(*hes-pahi don gyi mdo-sde, niārtha-sūtra*)より外に轉ずるが故なり。^② 正理癡妄とは論理(*gran-tshigs, hetu*)等の支分(*yan-lag*)を覺知せざるが故なり。^③

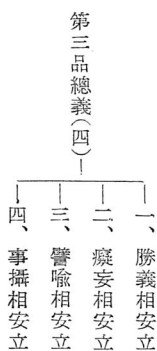
(二)〔入地の菩薩は勝義の相に善巧なるにより、往昔修習せるに依り〕功用を用ひざるも〔この義を〕知る。〔勝解行地に住せる菩薩は勝義の相に善巧ならざるにより、往昔修習せざるが故に〕功用を用ふるも亦〔この義を〕知らざるは、〔彼等(勝解行住菩薩)の過失なりと雖も論理の過失に非ざるが爲〕論理の過失・必過無きによつて論理〔は清淨〕なり。^④

其は何の故なりや。善清淨慧よ、若し行相と勝義の相と異なくばといふより已に阿耨多羅三藐三菩提を證るべしとい

ふと、而して、是の故に行相と勝義相と異なれば道理ならざるなりといふに至るまで廣説するその教説と相應するものなり。

二、「微細(pura-ba)と甚深(Zab-ba)と難通達(togs-par dka-ba)と」三語は「微細と差別せんが爲に甚深と説くものなり」^⑧。その如く次第して説くなり。其等の義は「聲聞乗と」共通して説くべきなり。極微細(mchog-tu pura-ba)「極甚深、極難通達」と説くは聲聞乗等より差別するもの(不共)なり。

註① 解深密經の第三品は「解説」に於ては 58a より解釋せられ、その第三品の總義は左の如くである。



今、本疏は先づ總義の中、第二癡妄相について義釋する。

② 本疏の癡妄相の義釋は「解説」59ab に踏襲してゐる。

③ 了義經より外に轉ずとは、行相は五蘊等依他の自性の生・住・滅であり、勝義相は諸法の法無我なる圓成の自性である。この二は了義經中、諸行の唯無我のみなると唯無自性のみが勝義相なるが故に異と非異とより超過せる相なりと説く。然るに不了義經中、或は行は依他の自性なるに對して勝義は圓成の自性なるが故に自性安立の門より異と説き、或は依他の清淨なる自性は圓成の自性なるによつて、本性の一の門より非異と説く其の經に隨順して聲の如く執するのである。この二は假設癡妄であつて勝義を如理作意しないものであるといふ義である(「解説」59b)。

- ④ 等は「解説」Goaによれば、譬喩 (dpe, dpyanta) を等取する。
- ⑤ 論理の支分とは、所量有性 (jes su dpaḡ par bya ba la yod pa, anumeye satvram) と同品有性 (mtshun-paḡi phyogs la yod pa, sapakṣe satvram) と異品非有性 (mi-mtshun-paḡi phyogs las ldog pa) であり、譬喩の支分とは、同法 (Chos mtshun-pa) と譬喩 (dpe) と不同法の譬喩 (Chos mi thun-paḡi dpe) である (「解説」Goa)。
- ⑥ 功用を用ひざるも等は「解説」Goaによりて補譯した。Lamotte の佛譯は「解説」を参照せられないが爲にこの條下は意義明かでない。
- ⑦ 異なくばは、本疏に於て tha-dad-pa gyur na ni としつて否定詞を缺くが、經の本文によりて加へて譯した。
- ⑧ 微細と云々、「解説」Goaに踏襲してゐる。經句の釋である。

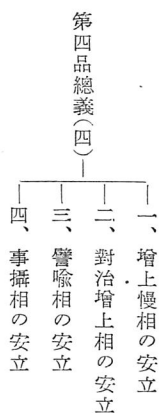
四、第四(一味)品^①

第四〔品〕に於ては、三種の増上慢を對治して一切一味の相を説くなり。三種の増上慢とは、所取の増上慢^③ (gzun-paḡi mñon-paḡi ña-rgyal, gahyābhimāna) と能取の増上慢^④ (ñuṣin-paḡi mñon-paḡi ña-rgyal, grahāṭākābhimāna) と相差別の増上慢^⑤ (mṡhan-ñid rab-tu-dbye-baḡi mñon-paḡi ña-rgyal, lakṣaṇa-prakāṡākābhimāna) となり。

その中、所取の増上慢對治の教説とは、其は何の故なりや。須菩提よ、諸蘊の中、清淨の所縁は是れ勝義なりと已に顯示しつゝと廣説せり。

能取の増上慢對治の教説とは、復、須菩提よ、觀行の比丘はと廣説するものなり。相差別の増上慢對治の教説とは、復、須菩提よ、蘊の如くと廣説するものなり。

註① 解深密經の第四品は「解説」に於ては、より解釋せられ、その第三品の總義は左の如くである。



今、本疏は増上慢對治相の義科と其の經文の範圍とを開示する。

② 本疏の對治増上相の義科等は「解説」66a に踏襲・引用されてゐる。

③ 所取の増上慢とは、蘊等所取の法に於て種々相 (num-pa sna-tshogs) の所縁ありての現觀 (mion-par-rlogs-pa, abhisamayā) を説くことによつて、勝義を證れりと思惟して自己の知識 (rang-gyis-shes) を他の(人々に)記別することである。其の對治は諸蘊の中に於て清淨所縁あり、其を我は勝義なりと顯示しつ等と説くのである(「解説」66b)。

④ 能取の増上慢とは、蘊等一法の眞如、勝義、法無我に通達し、又、其より他の各々の法に於ても眞如・勝義・法無我を尋求することである。その對治は、復、須菩提よ、觀行を修する比丘等と説くものである(「解説」67a)。

⑤ 相差別の増上慢とは、蘊等の諸法は互に異相あるが如く、其等の眞如・勝義・法無我も亦異相ありと思惟することである。其の對治は、須菩提よ、復、蘊の如く等と説くものである(「解説」68b)。

五、第五〔心相〕品^①

第五〔品〕に於ては、一、心祕密 (citaguhya) に就て三種の癡妄〔對治を記載するなり〕。自性癡妄 (ho-bo-hid la cin-

tu-rmois-pa, svabhava-pramoha) と差別癡妄 (rab-tu-dbye-ba la cin-tu-rmois-pa, prakāra p.) と釋難癡妄 (rgal-lahi lan la cin-tu-rmois-pa, codyaparibhāra p.) となり。

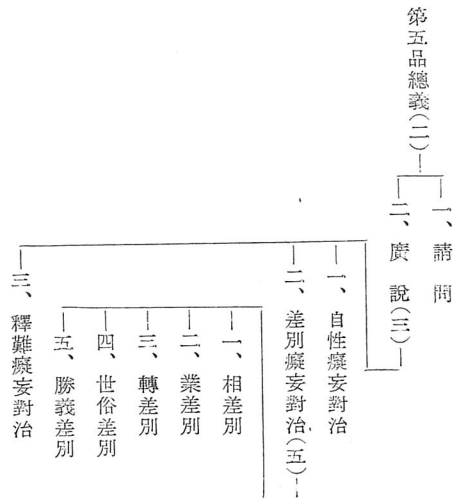
二、その中、(一)自性癡妄を對治する教説は、廣慧よ、この六趣の生死といふより無色界の中には二執受なしといふに至る間なり。

(一)差別〔癡妄對治〕は五種なり。一、相差別^④ (mishan-tid rab-tu-dbye-ba, laksanaprakāra) とは、亦阿陀那識と名づく、亦阿賴耶識と名づく、亦心と爲すといふなり。二、業差別^⑤ (las rab-tu-dbye-ba, karmaprakāra) とは、此の〔識〕に由つて此の身を隨逐し、執持するが故なりと等なり。三、轉差別^⑥ (bying-pahi rab-tu-dbye-ba, pravrttiprakāra) とは、眼識等と俱〔轉〕すると、及び同時ならずして轉するとの故なり。四、世俗差別^⑦ (kun-rdsob kyi rab-tu-dbye-ba, samvrttiprakāra) とは、法住智 (chos kyi lugs ces-pa, dharmanaya, nityāna) の境 (gocara) の祕密なり。五、勝義差別とは、阿陀那を見ずより意識をも見ずといふに至るまでにして、無分別智 (nirvikalpakajñāna) の力 (bala) と相應するが故なり。無分別智の境 (gocara) の祕密あり。其は勝義の境の祕密なりと知るべきなり。

(二)釋難の差別とは、〔心は〕種子 (vīja) を攝持することによつて、他の二(意と識)も亦〔種子を〕攝持するが故なり。彼〔の心〕は祕密に攝持することによつて、他の二なる意と識も亦祕密に攝持すと知るべきなり。

其〔心〕^⑩は一切の種子なるが故に祕密に安立するなり。其等(心・意・識)の中より其〔心〕は開演の適應性非ざるが故と諸轉識によつて種子相 (vījalakṣaṇa) に住するが故と自相 (svalakṣaṇa) によつて住せざるが故とによつて難知なり。^⑪

註① 解深密經の第五品は「解説」70a-100a に於て註釋せられ、その第五品の總義は左の如くである。



今、本疏は廣說の總義を示し、その總義三の文科と義科とを擧げてゐる。

- ② 自性とは、心・意・識をいひ、其の癡妄は其等の相を知らざることである〔「解説」79b〕。
- ③ 差別とは、阿頼耶識の差別は五種であつて、その癡妄の對治を五種として説くものである〔「解説」82n〕。
- ④ 五種、五種の差別の文科は「解説」82a に出で居り、本疏と相應するものである。
- ⑤ 相差別とは、かの阿頼耶識に於て、阿陀那識といひ、心といふ等三門によつて説くのが相差別である〔「解説」82b〕。
- ⑥ 業差別とは、阿頼耶識・阿陀那識・心の三事に、各別の業用あることをいふ〔「解説」83n〕。
- ⑦ 轉差別、〔「解説」84b〕。

⑧ 世俗差別とは、心・意・識の自性等の施設は雜染分の差別であつて世俗差別である。その差別を知らざる癡妄の對治は緣起の法住智を説くことである〔解説〕 103a)。

⑨ 勝義差別、「解説」 104a

⑩ 其〔心〕は等、「解説」 108ab に引用・踏襲せられてゐる。

⑪ 其〔心〕は開演の適應性非であるが故、本疏の文は、*de ni bstan-paḥi sa ḥog ma yin-paḥi phyir* とあるが、「解説」 108a には、*sa ḥog* に對して *ḥos* とのみある。今は「解説」に據つた。

六、第六〔諸法相〕品^①

第六〔品〕に於ては、一、六利樂(*dogs-pa, prayojana*)と相應する法相を説示するなり。一、對治利樂(^(ab)*gñen-poḥi dogs-pa, pratipakṣa prayojana*) 二、譬喻利樂(*kun-tu-bstan-pa (dpe) ḥi d, ādarśana p.*) 三、成就利樂(*mñon-par-sgrub-paḥi d, abhinihāra p.*) 四、方便利樂(*thabs kyi d, upāya p.*) 五、覺證利樂(*rtogs-paḥi d.*) 六、功德利樂(*phan-yon gyi d, anuṣaṅga p.*)なり。

二、(一)その中、對治利樂とは、四種の癡妄の對治なり。一、増益(*sgro-hdogs-pa, āropa*)の因、無の義に對する癡妄、二、損減(*skur-pa-hdebs-pa, āpavāda*)の因、有の義に對する癡妄、三、其の壞(*ljigs-pa, bhaya*)の因、雜染(*kun-nas-ñon-mois-pa, saṃkleśa*)に對する癡妄、四、清淨(*ñam-par-byan-ba, vyavadāna*)に對する癡妄となり。

(二)その中、譬喻利樂とは四種なり。一、義(*don, artha*)の譬喻、二、外(*phyi-rol, bāhya*)の譬喻、三、内(*nan, adhy-ānman*)の譬喻、四、非對引地(*mñam-par-ma-bshag-paḥi sa, asamāhita bhūmi*)の譬喻なり。

(三)そこで、成就利樂^⑤とは解脫(nam-pa-thar-pa, vimokṣa)の三門を成就するが故なり。

〔四〕そこで、方便利樂^⑥とは五事(相・名・分別・正智・眞如)に依つて知るべき方便の義と相應する三法相を説示するものなり。〕

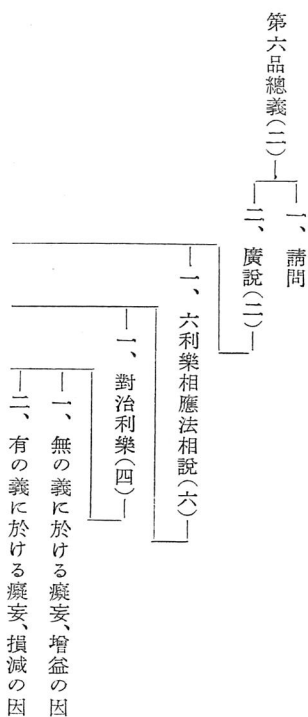
(五)覺證利樂とは〔三相を覺證することに依つて〕所知事(ceś-byahi dños-po, jñeyavastu)の義を徧知し、又、其の〔覺證の〕果を施設して、一切の所知相(ceś-bya nam-pa, jñeyākāra)と相應するが故なり。

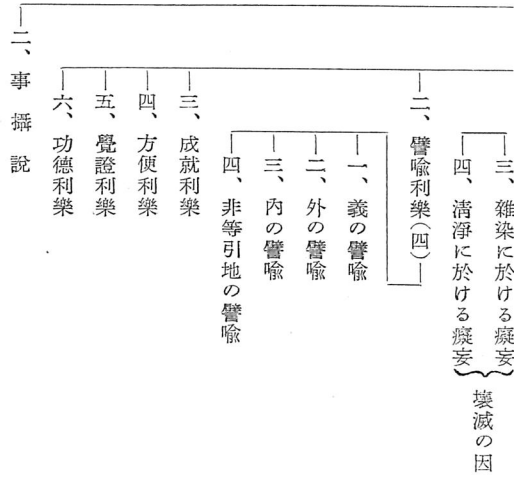
(六)功德利樂^⑧とは一切種智(nam-pa thams-cad mkhyen-pa, sarvākār-jñāna)を得て〔所知事の〕一切〔種〕を現等覺することを説示するが故なり。

そこで、遍知せらるべき事は法を知る説示なりと知るべきなり。

そこで、施設を爲すとは、かくの如くある時、菩薩は諸法の相に於て善巧なりと施設をなすが故なり。

註① 解深密經の第六品は「解説」109a-123a に註釋せられ、その第六品の總義は左の如くである。





今、本疏は廣説の總義を示して、義科を爲すものである。

② 六利樂、その文科は「解説」IIIIに擧げられてゐる。

③ 對治利樂、「解説」IIIIb

④ 譬喩利樂、同右 II5a

⑤ 成就利樂、同右 II6b

⑥ 方便利樂、同右 II5a この釋は本疏に缺いてゐるから、「解説」IIIIに依つて補つたものである。即ち、

thabs kyi (I18b) dgos-pa dñi-l-dan-pa'i chos-kyi mtsan-ñid bsam-pa shes-bya-ba ni dños-po lñi las bñen-nas rab-tu-ces-par

kyiur-baŋi thabs kyi don dan-lan-paŋi chos kyi mi-shan-ñid gsam bstan-pa gñi yin-paŋo.

⑦ 覺證利樂、同右 119a

⑧ 切德利樂、同右 121a

七、第七〔諸法無自相〕品^①

第七〔品〕に於ては、一、義^②に於て四種の邪解の對治は三無自性の教説なり。此を説示せずば、〔三〕無自性の祕密 (Idem-por dgeons-pa, abhisandhi) 教説に於て義を邪解する四種によつて失壞するなり。其の對治の爲に此〔三無自性〕を説くものなり。

二、そこで、(一)義に於て四種の邪解とは、一、三自性に依らざるが故に無依止 (gnas med-pa, anāśraya)〔邪思惟〕二三種の無自性の密意を捨離するが故に無密意 (dgeons-pa med-pa, anabhiprāya)〔邪思惟〕三、無増益と無損減との義を捨離するが故に無義〔邪思惟〕四、自相無きものは無生なり等の如く前後を觀待すること無きが故に無觀待〔邪思惟〕なり。

(二)教説が貪愛 (budod-pa) の對治を説かざる時、〔修行〕人^③の差別〔を説くが、其によつて〕は成就 (gsar-bu-pa) の差別と信解 (mos-pa) の差別とによつて知るべきなり。

(一)その中、成就の差別とは三種の依止 (gsin) と相應するものなり。一、教説の依止 (bstan-paŋi gsin) と相應すと^⑤は、諸の衆生は本従り已來善根を種えずといふ等なり。二、種性の依止 (rigs kyi gsin) と相應すとは、勝義生よ、

一向趣寂聲聞種性の補特伽羅はといふ等なり。三、縁の依止 (kyen gyi gshi) と相應すとは、菩提に轉ずる聲聞を我は異門をもつて菩薩なりと説くといふ等なり。

(二) 信解の差別とは五種なり。一、種性圓滿より成ると、信解圓滿より成ると、智慧圓滿より成るは第一〔人〕にして、諸の衆生は上品の善根を種えといふ等なり。二、種性⁽¹¹⁾と信解との圓滿より成り、智慧より離るゝは第二〔人〕にして、諸衆生は善根を種えといふ等なり。三、種性⁽¹²⁾と信解とより成り、少智慧とより成るは第三〔人〕にして、如來の法教は諸の衆生に對して種々の勝解によつて轉ずといふ等なり。四、種性⁽¹³⁾と信解との圓滿より成り、惡慧なるは第四〔人〕にして、若しは諸の衆生は上品の福德と智慧との資糧に至るまで能く積集せずといふ等なり。五、一切圓滿し、話頭よりして領解するは第五〔人〕なり。

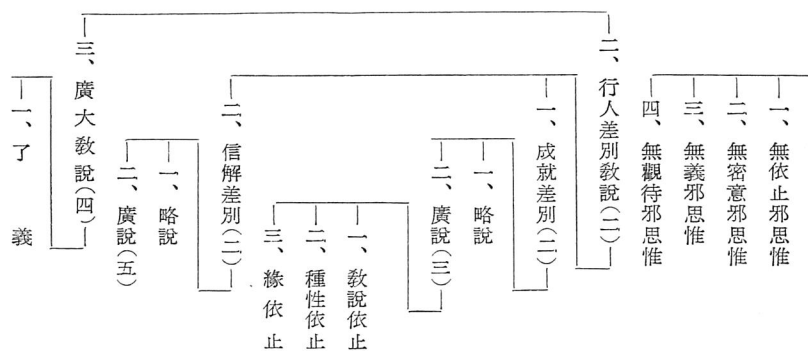
(三) かくの如く聖者勝義生によつて熱酥 (chab-mar, girta) を入るる時といふと、及び薑 (bcab-geo, guntshi)・彩畫地 (rimo bri-baji gshi, citradhara)・虚空 (nam-makhaq akāśa)〔等四種〕の譬喩教説は即ち、戒と定との話、智慧の話、世俗の話、勝義の話〔の四種の話と〕次第して相應すべきなり。(未完)

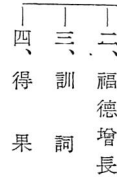
註① 解深密經の第七品は「解説」123a-16rb に註釋せられ、その第七品の總義は左の如くである。

第七品總義(二)――請問

廣説(三)――

一、無自性意趣教説(四)――





今、本疏は廣説の中、無自性意趣教説と行人差別教説の科を義釋する。

② 義に於て等、「解説」124bに踏襲せられ、相應する。

③ 「修行」人の差別等、「解説」128b以下参照。

④ 成就の差別、諸の如來は三無自性を施設することによつて諸の衆生は清淨分と相應する業を成就するのであるが、その成就について差別あるを云ふ〔解説〕130b—131a。

⑤ 教説の依止と相應すとは、衆生の初入門者が如來の法教に依つて清淨分の道を成就することである〔解説〕131a。

⑥ 種性の依止と相應すとは、如來の三無自性の法教は各自の種性の依止によつて聲聞乘が清淨分と相應する道を成就することである〔解説〕134b。

⑦ 縁の依止と相應すとは、不定種性聲聞が如來の三無自性の法教に於て勸發せられる縁の依止によつて無上菩提に轉廻する道を成就することである〔解説〕142b。

⑧ 信解の差別とは、世尊が三無自性を施設するについて、諸衆生の信解の差別が多數あることである〔解説〕143a。

⑨ 五種、「解説」144abに於て、踏襲せられ、相應するものである。

⑩ 「解説」144ab 参照。

⑪ 同右 146b 参照。

⑫ 同右 149a 参照。

⑬ 同右 152a 参照。

⑭ 同右 153b 参照。

⑮ 同右 156a 参照。